
最後の魔法は恋の魔

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の魔法は恋の魔

【Nコード】

N6525Y

【作者名】

レオ

【あらすじ】

空の国兼魔法の国に住むユナ。

元気でヤンチャなユナはカイラに恋をしている。

けれど、カイラに気持ちは伝わらず・・・。

（前書き）

レオの作品、2作目です

今回は短編ですので、お手軽に読んでいただけると（笑）

少し残酷な場面があります。

大抵は魔法＆恋のお話ですので

ご安心くださいませ！

登場人物

ライ・カイラ

レイ・ユナ

ラミラ・アン

ナイル・ココ

フラ・ルカ先生

ユナのママ

「ジュエリーシューツト!!!!」

シャラリンツ

キレイな音があたしの頭上を過ぎる。

「かあああの一っ! スターシューツト!!」

次はキャピンツとはじける音が頭上を過ぎる。

「イツテエツツ!」

前を見ると、痛い騒ぎながら頭を抱えてる男子。

「あ。ごめんカイラ」

「おまつっ・・・! 反省とか1mmもしてねえだろ!」

前でわめいているのは、ライ・カイラ。

「うん、してない」続いて、フラワーファンタジー!」

花びらがふわふわあつとあたしとカイラの周りを飛ぶ。
まるで生きてるかのよう。

ここは、空の国。空の国兼魔法の国だ。

あたしがさっきから言ってるのは、魔法の呪文。

ああ、えっと自己紹介忘れてたね?

あたしは、レイ・ユナ!

魔法学校で、成績1位キープ中です」

魔法の国では小学生は魔法学校に通うんだ

大人は地上に降りて人助けをしたり、魔法の料理店を開いたり。

「クシュンツ! 俺花は苦手なんだよっ! 知ってんだろ!」

「知ってるよ? だから、わざとやったんじゃないの」

「うわあっ 極悪人だな?! お前?!」

「ええ、極悪人ですよ? それがどうされました?」

「もういいよっバーカ！それより、学園祭の明日だぜ？！練習、行くぞ！」

カイラがいらしながら言う。

あたしはカイラが好きだ。

カイラは格好良くて皆にもてるから

こうやって、ちよいちよいチョツカイださないと

あたしなんて忘れられてしまいそうなんだよね。

「練習つて言つても、あたし魔法で盛りあげるだけよ？」

「だから、盛り上げ役も一応参加すんだろ？」

明日「今日はリハ！そのくらい考えろよな、この単細胞め」

「うっさいわねえっ！どーせ馬鹿ですよっ！カイラの頓珍漢！」

あたしは頬を膨らまして、呪文を唱える。

「スカイシューツッ！」

カイラに向けて指を刺すと

カイラは宙に浮いて、会場まで投げ飛ばす。

あたしもスピードシュートで会場に滑り込む

「いきなり飛ばすなよな！ドアホ！」

「単細胞とか言うからだよーだっつ」

「ほんとうの事を言つたまでだね、はんっ」

ドヤツと顔をするこいつを今すぐにでも

地上にぶっ飛ばしてやりたい・・・

「はあい、リハースル、始めますよ」

「はあい、ほら、カイラ。いくよ」(笑)

「なんで笑つてんだよ、うざいわ！」

「うっさわね、はやくいくよっ」

あたしにはこんな会話さえも幸せだった。

あした、この幸せが突然に崩れてしまうなんて
あたしはどんな魔法を使っても、見えないだろうな。

次の日。

学園祭当日っ

ユナ、はりきりまくりですっ！

「服、どうしよっかなっ?!」

あたしは「ファッションチェンジ」を使って

コロコロ服装を変えて迷っていた。

「んー・・・これ?でも、やっぱりこれかなあ・・・?」

最終的に、真っ白の膝丈ワンピースに、ムートンブーツ

あと、白いフワフワの魔法の杖で完璧っ

「ママ、いってきますっ」

「いつてらっしやい、楽しんできなさいね」

ママは優しい笑顔をあたしに向けて、手を振った。

学園到着。

祭りは大賑わいだった。

「うわあっファンタジックッッ」

あたしは一人で大盛り上がり。

「なーに一人で盛り上がりつつちゃってんの?」

カイラがひよっこりと、横から顔を出した。

「うぎやっ?!?ちよっ驚かさないでよねっ?!」

「お前は一人でぴょんぴょこ跳ねてるからだろ。

ほれ、さっさといくぞ?」

「むうつわかったよおっ」

あたしは膨れっ面のまま、カイラは笑いながら会場へとあたしを促した。

「さて！今日は本番ですよっ！皆さん、楽しましょーね？」

フラ・ルカ先生が天使の微笑みのように微笑み

皆も笑みを零しながら、元気よく「はあい！」と返事する。

「さあ、もう公演時間になるわっ！ステージに上がってっ」

皆わあわあとステージに上がる。

あたしは、カイラを呼び止めた

「カ、カイラ！」

「ん？なに？」

「あ、あのさ、こーゆ公演が終ったらさ？」

「うん？」

「一緒に・・・」

「お祭り廻ってくれないかな？」って言おうとしたら

横から、邪魔が入った

「ねっカイラ？お祭り今日一緒に廻るよね？」

「え？別にいいけど？」

「ッ・・・」

あたしは思いつきり絶句。

あたしが言おうとしたことを、この学園のアイドル

ラミラ・アンに取られてしまった・・・。

「ああ、で？ユナ、どうした？」

「い・・・いやなんでもないの。いいの、気にしないで」

「そう？本当に？」

カイラが心配そうにこっちを見る。

「ほ、ほんとに大丈夫！だから、ステージもう上がるよ！」

あたしは恥ずかしいのと悔しいのとで「スピードシユート」を使って

その場をすぐに離れた。

「ユナ？顔色悪いよ？」

友だちのナイル・ココに聞かれ、あたしはびくつとした。

「い、いや？別に？ちよつと緊張かな？ハハッ・・・」

「そう？無理しないでね？ああ、そういえば、さっきアンがユナのこと呼んでたけど？」

「そうなの・・・？」

「うん、ステージ裏にきてってさ？」

「そ・・・そっか？わかった」

あたしはノリ気じゃなかったけど、一応ステージ裏に行った。

「アン・・・？」

ステージ裏は薄暗い。

意外と周りによく見えない。

コツ・・・コツ・・・コツ・・・と

あたしがはいている、ブーツ（衣装の）の音が響く。

「カイラ？あたしの事、好き？」

ふいに、聞こえた声にあたしの心臓は浮き上がった。

「ああ、大好きだよ・・・。」

「ユナなんて好きじゃ、ないよね？」

「ッ・・・。。好き・・・じゃあないよ・・・。」

あたしなその言葉とともに、頬に涙が伝った。

「じゃあ、キスして？」

「・・・。。わかった」

薄暗いと思ったから、あたしはその状況を覗いていたんだけど・・・。

薄暗くても、やっている事は見えてしまった

「アン・・・はわざとあたしを呼んだ・・・。」

あたしはつい、言ってしまった。

アンはニヤリ・・・と笑っていた

カイラは、目を見開いておどおどしている。

「いやっユナ?!これは・・・!」

「カイラ？言い訳とか、しなくて・・・いいんじゃないの？」

カイラは・・・アンのことが好き、なんでしょう？・・・
言い訳なんて・・・ッッ

あたしはそういつて、その場を走って逃げた。

「ジュエリーシュートッ」

あたしはジュエリーシュートを唱えて

自分の顔を整えた。

「さあて、出番よ！いくよおっっ」

先生が勢いついて言う。

みんなノリノリなのに、あたしとカイラは凄く気まずい雰囲気。
そんななか、アンはカイラにべったり。

あたしの胸はズキズキと痛むだけ・・・。

「ユナ、盛り上げ役の出番よ！！！」

そういわれ、あわてて空に上がる。「スカイハイシュート」

あわててあがってしまったからだと思う。

・・・あたしは初めて魔法失敗で、地面に落ちた。

あまり意識がない中、薄っすらと目を開けると

あたしの周りに人が集まり、赤い色の液体がだらだらと流れていた。

あたし・・・死んじゃうんだね・・・？

そう思ったとき、あたしは誰かに抱きかかえられた

「ユナ？！どうしたんだよ？！何で魔法失敗・・・？！」

カイラの声。抱えてるのもカイラ、なのね？

アハハ・・・あたし、今死掛けなのに嬉しいとか思ってる
でも、それと同時に悔しさもまたあふれ出てきてしまう。
けれど、そんな感情は押し込んでしまう

「力・・・イ・・・ラ・・・？あた・・・し、い・・・ま

う・・・れ・・・しい・・・よ」

そんな文章が必然的に出てきた。

そして

「ハ・・・ッピー・・・シュー・・・ト・・・ッ」

>ハッピーシユート<

幸せを願う、魔法。

さよなら、カイラ。

カイラ・・・

「だい・・・すき・・・よ」

最後に力を出して、あたしは微笑む。

あたしの人生の最後の魔法は

幸せの魔法。

恋の魔。

- E N D -

（後書き）

ご覧くださってありがとうございました（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6525y/>

最後の魔法は恋の魔

2011年11月20日05時41分発行